

都市における「暗黒資源」としての水辺利用 ～都市河川におけるライティング・シップ社会実験の試み～

ミズベリング・プロジェクト事務局 滝澤恭平

「TOKYO WONDER UNDER・東京ワンダーアンダー」の狙い

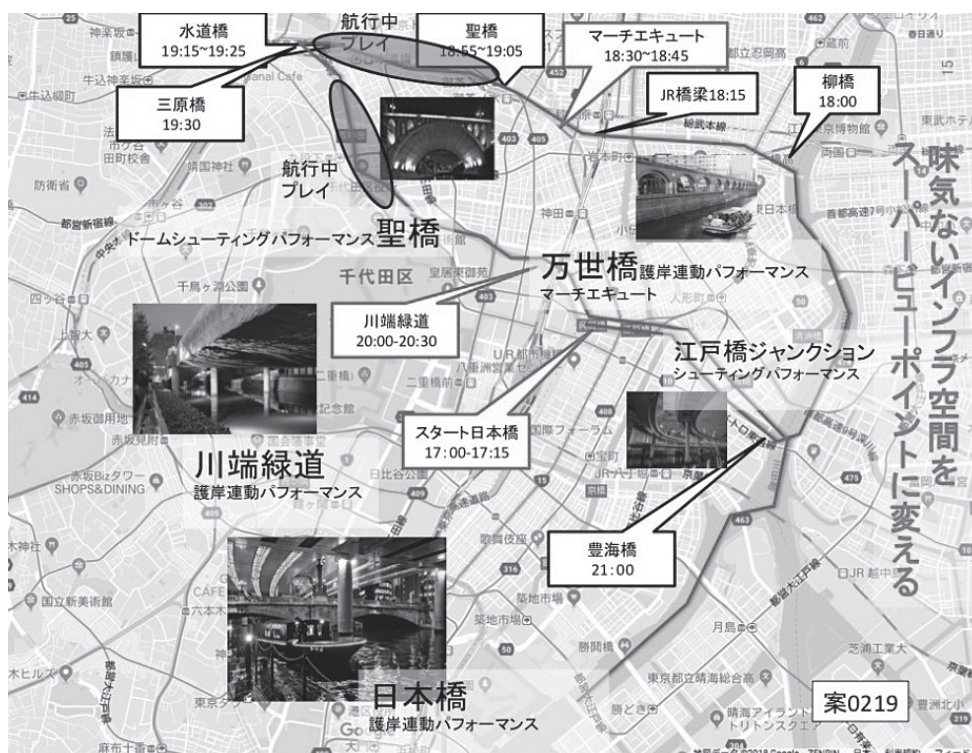
ミズベリング・プロジェクトは、日本ではまだ十分に活用されていない国内の水辺環境に対する社会の関心を高め、その新しい活用の可能性を切り開いていくための官民一体の協働プロジェクトである。①まちにある川や水辺空間の賢い利用、②民間企業等の民間活力の積極的な参画、③市民や企業を巻き込んだソーシャルデザインの3つを基本コンセプトとして、水辺とまちの未来を創造していくための取り組みを2014年より推進している。

ミズベリング・プロジェクトでは、2018年3月に、「TOKYO WONDER UNDER（東京ワンダーアンダー）」という社会実験イベントを実施した。本実験は、照明を搭載した船（ミズベリング・ライティングシップ）

が、神田川、日本橋川、首都高橋脚や橋、建物などに光を投射しながら、航行して回るという内容だ。実験の目的は、東京の知られざるインフラ・アンダーワールドに光をあてて、暗黒狭小河川空間を表現空間として活用する余地がないか試してみることである。さらに、この実験を通して、官民連携で日本に新たな水辺産業を生み出すきっかけをつくり、世界にむけてアピールしていこうという意図がある。

表現空間への変容

ライティング・シップのコースは以下の図の通りである。船は、日本橋を17時過ぎに出航。その後、シッブは夕暮れの日本橋川を下り、隅田川を北上、神田川に入った。ライティング・シップのパフォーマンスを水上



図：ライティング・シップの航路



から観覧しようと、シップの後ろからフォローする小型クルーズ船やカヌーが続々と集結、ライティング艦隊が出現した。

18時半に、ライティング・シップはマーチエキュート神田万世橋前の神田川に到着、パフォーマンスを開始した。ビルに囲まれた万世橋の真っ暗な渓谷が一気に、光の空間に変容する。光のみならず音楽も連動する。最初に奏でられたのは、ヨハン・シュトラウス二世の「美しき青きドナウ」。神田川の淀みに、ドナウは意外とあう。ゆったりとした場が生まれた後、トランペット奏者がクールにソロを奏でる。神田川沿いに並ぶお店から客もぞろぞろとテラスに出てきて、何かとんでもないことが普段気にもとめていない河川空間で起こりつつあるのを目撃する。橋の上の通行者も足を止めて見入る。ボルテージが上がったところで、河川堤防にプロジェクションされたのは、東京都の「パラリンピック」PVによるムービーショー。暗黒河川空間に、スポーツとマンガがコラボレーションした躍動的な映像が映える。

都市の暗黒河川空間が、非常に魅力的な表現空間として変容したわけであるが、通常、屋外で映像などの表現行為を行うには規制がある。「屋外広告物条例」という規制は、屋外の公共空間が広告物で埋め尽くされ、景観の質が劣化してしまうのを防ぐために造られた条例だ。これは東京都23区の場合は、各区で、表現物が広告物にあたるかどうかを判断することになっている。もともとは広告物による景観の悪化を抑止するための規制であったが、一方で、屋外で表現行為を行うことの抑制にもなっている面もあり、公共空間で新しい表現や利活用にチャ

レンジが生まれにくい原因の一つにもなっていた。今回は、規制による公共空間の「暗黙の暗黒化」を乗り越えるために、様々な調整を行政と行い、社会実験として実現可能となった。

光の演出装置としての河川インフラ

本社会実験イベントでは、ライティング・シップのパフォーマンスを、リアルタイムにライブ中継して鑑賞する、パブリック・ビューイングイベントも行われた。会場は、日本橋川が建物脇の緑道に沿って流れる、大手町ファイナンシャルシティの1F、アトリウム。ライブビューイング会場では、ゲストの紹介が行われた。一人目のゲストは、今回の選曲を担当した「都市楽師プロジェクト主宰」鷺野宏氏。「今回はライブ感を出したかったので、船上DJミックスのあいだに、都市の様々なノイズ、鉄道の音などが響くところで、サウンドスケープを聴くためにトランペット奏者を選びました。橋の下や首都高の下は、低い音で回り込む音を借景にできる贅沢な音楽空間。演奏家も嬉しいと言ってます」と鷺野氏は話す。続いて、都市計画を専門とする東京大学工学系研究科の中島直人准教授が登場。中島氏は「一般的には、陸と水の距離が近いのがいいという価値観がある中で、東京は水辺と陸が距離があり、離れている。でも、今回の実験は、逆にそれを特徴として活かしてやっている。これは、アムステルダムではできないことです」と話した。

パブリック・ビューイング会場のモニター回線が、船に切り替わる。ライティングシップは、聖橋、水道橋を越え、本郷台の渓谷を照らし出しながら、三原橋付近か



ら日本橋川に入ろうとしている。首都高の橋梁と橋脚にミラーボールが幻想的に煌めき、テンポのよいテクノ・ミュージックが響く。首都高と日本橋川水面に囲まれた虚の空間は、ホットなクラブのダンスホールになったようだ。移動する船から投影する光の流れによって、首都高橋梁裏面は、インバーダーゲーム機のようなビジュアル装置インフラに生まれ変わった。観衆は、固唾を呑んでモニターを見つめている。光とビートでむき出しになった都市の内蔵はとても美しい。

20 時、大手町ファイナンシャルシティ前の日本橋川に、ミズベリング・ライティングシップが到着した。観衆は会場から水辺へと向かう。目の前にライティング・シップが停泊していた。船にはドーム型のガラス容器にビルトインされた照射光学機材がずらりと設置され、特殊な用途の観測船のようなテックな雰囲気。今回の社会実験イベントを行うために、船はカスタマイズして仕立てた。通常は、ライブで使用される照明機材を船に搭載し、航行するための荷重や安全面などの許可を、JCI（小型船舶検査機構）の立会い試験の上で、得ている。船に乗るレポーターと、陸側の司会が、マイクで声をかけあい、水陸同時開催「水辺で乾杯」カウントダウンが行われた。ビーム上の光線が首都高橋梁下に幾筋もの筋を伸ばし、ドット模様となって広がる。トランペットのソロ演奏の音が、橋脚下に響き渡り、クールなライブハウス空間に変容する。通行人たちも、足を止めて見入り、スマホで撮影を始めた。ライティング・ショーで陸と水上

の観客を魅了した船は、静かな音楽を奏でながら、東京湾の母港へと帰っていった。

「暗黒資源」としての河川利用

「TOKYO WONDER UNDER」の結果は、その日の夜のフジテレビで報道されたほか、AFP 通信によって世界にも報道された。ナイトタイムエコノミーの活性化という文脈や、通行人たちが見入った反応などが伝えられた。社会実験イベントを行なったミズベリング事務局として感じたことは、①都市の河川空間の表現／媒体空間としてのポテンシャル価値の高さ、②夜間の水辺利用の可能性である。

全国の都市河川において、昨今、様々な水辺の利活用が進み始めているが、表現空間として利用している例は意外と少ない。表現空間としての利用の興味深い点は、それまで一般の人びとからは価値がなく、暗く汚く危険だと思われていた水辺が、表現と演出によって、一転して、魅力的な空間として変容することである。河川空間は、都市の中心市街地の重要な軸線や拠点に隣接していることが多く、表現によって魅力的な空間となった河川空間は、多くの人びとが惹きつけられ、鑑賞する対象としての空間、すなわち「媒体」となる。「媒体空間」としての河川は、通行者や、散歩者といった不特定多数の人びとへと表出する、新たな都市のタッチポイントとなるだろう。

さらに、表現／媒体空間としての、河川空間／インフラ



空間からの変容は、夜の時間帯において一層劇的に、その効果が発揮される。昼間の河川空間は、都市にあってはなお、水面の流れや魚影、水鳥など、自然的な景観を携えていることが多いが、夜間になると、表現を通して、都市的な媒体空間の演出舞台となる。光による表現という点では、水面の上に橋脚が架橋されていたり、カミソリ堤防が続くといった、通常の景観評価の視点では、マイナスとなるポイントが、逆に非常に魅力的な演出装置に転換される。さらに、河川空間は、道路空間や公園緑地といった都市施設と比べて、自然度が高い公物であり、照明装置や照度自体が低いことが多い。これが、光による表現空間としては逆にプラス要因となるのである。

夜間の表現空間としての河川空間利用の事例では、他に、徳島市の新町川のLEDによる演出などが知られている。新町川でもまちなかにありながら、暗い空間としての河川空間を上手く光をデザインしながら、幻想的な空間に変えている。もともとこのジャンルでのリーディ

ングシティであった大阪や、最近では、東京隅田川でも河川空間の橋脚などでのイルミネーションが進んでいるが、やはり都市における適度な暗い照度環境をうまく活用しながら、適度に光をデザインしていることがポイントである。むやみに明るくするというだけでは、その魅力は失われてしまう。人びとが安心できる視点場の照度環境を保ちながら、表現空間は暗く保つといった、快適な暗黒の照度デザインが求められるだろう。

都市の中にボイドとも言える、未利用のオープンスペースを持つ河川空間であるが、暗黒、闇空間という価値軸でも、都市の中に未利用の「暗黒資源」を携えている。人びとは、古来より闇と光の境界に、ファンタジーを投射し、ロマンを抱いてきた。江戸時代から行われてきた隅田川の花火大会は、まさにそういった河川利用と捉えられる。「暗黒資源」としての河川利用は、都市の魅力のひとつとして、今また取り戻されようとしている。
(たきざわ きょうへい)